



錆び付きながらの空回り——私の父(その2)

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。
「公事宿法律事務所」代表。

えびす様との約束が叶い、父はその後も生き続けてくれた。余命4ヶ月であると宣告された父が生き続けてくれていることは私にとっては奇跡の出来事であった。しかし、他方では、小学生の時から寿命50年という时限爆弾を抱えて生きていかなればならない悲しみも時々感じていた。また、「世の中の人のために生きる」

の後も生き続けてくれた。が世の中の人のために生きることになる。これが父の命がえびす様に突然取られてしまふのではないかという恐怖心が心の中にあり、その姿を私の目の前に時々現していた。何とも表現するのが難しい影を落としながら過ごしていったような気がする。

その後両親が働き続けてくれたおかげで私は函館にある高校に越境入学した。我が母校の「校是」は社会貢献をする人材を輩出することの1点にあり、何年かかってもそれをやり遂げたくなる種を一人一人に育つつもりであると校長先生が語っていた。テレビも冷蔵庫もない寮生活を通じ、定期的に順番が回ってくる「寮日誌」の中に自分の将来像、自分にとっての社会貢献のイメージを書き綴るなどして将来の歩むべき道をそれぞれが模索していた。私は弁護士になることを決心し、平成6年4月1日に晴れて弁護士となる。

大学時代の恩師である家永三郎教授が教え諭して下さったように、私たち法律実務家が人権というものを生業とし、その「人権」が「イメージーション」(想像力)であるならば、日々、私自身のイメージーションが試される以上、どのように努力してもいつも足りないことしかできないことを思い知らなければならぬと思つていた。

弁護士の仕事を通じて「世の中の人のために生きる」とことになる。これが最後の墓参だと思ったのだろう、長い時間をかけて先祖のお墓を綺麗にしていた。その姿を見て私は涙が流れるのを必死に我慢した。そこから頻繁に釧路に帰ることとなる。そして、令和3年12月7日、父が満88歳になつたこの日、好運にも私は父の米寿のお祝いができた。しかし、その後も父はどんどんと瘦せていった。令和4年1月下旬、私は父と一緒に担当医師から入院の説明を受けるため、自家用車で釧路へと向かつた。釧路に到着した後はすでに食欲も潤滑油もなく錆び付いて空回りする日々がいまも続く。何かに追われ、何かに急かされて生活をしてしまつた私は、父の還暦、古希、喜寿、傘寿のお祝いもできないまま時を経過させてしまったが、この7、8年ほどは、毎年、山形県酒田市にある高橋家のお墓参りを一緒にしてきた。平成30年ころから墓石に手を合わせるたびに、父は「今年で最後かなあ」と言っていたが、「絶対、来年も来るからね」月1日に晴れて弁護士となる。

酒田市へと一緒にに向かつた。父はこれまで何とか納得しようとしていた。父が余命いくばくもないと思っていたが、かつた私は、父の体調を見ながら山形の暑さが薄らいだ令和3年10月、泉となつた。